

しょうこ

抄子に 教えられて



障害をもつ娘と共に

加古三枝子



草思社

抄子に教えられて

1988 © Mieko Kako



著者との申し合わせにより検印廃止

1988 年 10 月 14 日 第 1 刷発行

著 者 加古三枝子

装幀者 中島かほる

発行者 加瀬 昌 男

発行所 株式会社 草 思 社

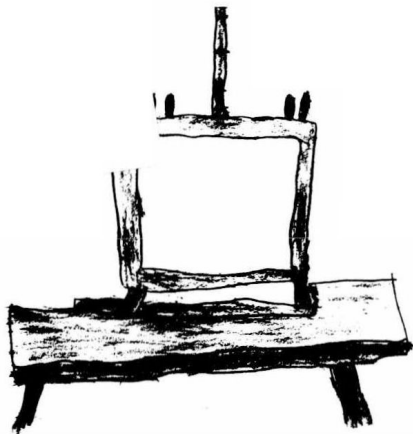
〒 150 東京都渋谷区神宮前 4 の 26 の 26

電 話 東京 03 (470) 6565 振替東京 7-23552

印 刷 社光舎

製 本 大口製本

ISBN 4-7942-0327-6



しょうこ
抄子に教えられて

障害をもつ娘と共に

加古三枝子

草思社

カバー・扉イラストレーション 小泉抄子

はじめに

人は、この世に生を享けた瞬間から、さまざまな人生を歩みはじめます。

美貌の持ち主もいれば、頭脳明晰な人もいます。もちろんそうでない人も、それぞれに親から譲り受けた身体と資質をもって、運命に左右されながら、複雑な人間社会のなかで喜怒哀楽を味わいつつ、生きていきます。

私は、比較的遅く結婚したため、もはや子宝に恵まれることについてはあきらめていたところ、神様の恵みを得て、一人娘を産むことができました。

ところが、私の妊娠中の病気が原因で、生まれてきた抄子に決定的なハンディを与えてしまいました。

私たち夫婦は、それまで順調に人生を歩んできましたので、わが子がふつうの人間として人生を送ることが困難であることがだんだんとわかってきたとき、生き続ける勇気を失いそうになりました。

しかし、抄子の無垢な心情にふれたとき、この子のためにどんな犠牲を払っても、親として出来

る限りのことをしよう、と固く心に誓いました。

以来、頻発する発作や薬の副作用とたたかいながら、抄子と共に無我夢中で生きてきましたが、幸いにも娘は、父親に似たのか、民族音楽や外国語などさまざまなものに興味をもち、彼女なりに生活の喜びや感激を見出してくれました。日常的な動作一つとっても、なかなかふつうの人のようにはいかないのですが、それでも前向きにいろいろなことに挑戦し、毎日を充実させようと張り切ってくれたのです（もちろん、それは身体の調子がいいときに限られるのですが）。

この本は、そんな抄子なりの一日、一日と共に生きてきた半生をつづったものです。

この原稿を書きはじめたときは、私の主人、小泉文夫は存命でしたが、昭和五十八年に亡くなりました。

今では、抄子が私の生きるささえとなっています。

抄子に教えられて
目次

はじめに

抄子の出生 11

名前のこと、産院生活 16

満一歳のころまで 19

発病 26

病院通い 29

奇跡 37

幼稚園 41

パパのインド留学 45

小学校入学 51

抄子、できないのよ 55

ママのバセドー病 58

ぬれぎぬ 64

薬にもすがる 69

再び東大病院へ 74

しろとペル 80

高学年になって 88

入学試験 94

関西旅行 101

旭出学園時代 106

私、病気じゃないのよ 110

スペイン好き、雅楽好き 119

初めての合宿 122

パパ、渡米 133

中学終了 142

すぎな会愛育寮に入つて 149

母の会 161

祖母の死 167

ママの香港旅行 172

暮れの入院 180

祖父の死 188

三人で飛行機旅行 195

チャレンジ精神 198

パパの死 205

との、聞いてください 213

パパの胸像 215

独立精神 227

あとがき

抄子に教えられて

抄子の出生

昭和二十六年の秋、私はリサイタルの準備に忙殺されていた。結婚以来たいした演奏活動もしていなかったで、この独唱会で当時の実力を一挙に世に問うつもりで猛練習を重ねていた。しかし、肝心の体の調子がどうも思わしくない。すでに決まっている十月三十一日という日取りを変更するわけにもいかず、演奏会がすんだらすぐに病院に行こうと思いつつ、無理に無理を重ねて歌っていた。だが、会の二週間前になって、急にのどがひどく痛みだした。

さっそく近所の医者に診てもらったら、おたふくかぜとのこと、一週間位で治りますと言われた。恩師のヴァーハーペニツヒ先生（ドイツ人）もたいへん心配され、見舞いに来られたが、一週間で治るものならば、とにかく演奏会には大丈夫ということになり、しばらく歌うのをやめて静養していた。医者 of 診断通り、二週間後のリサイタルまでには完全に良くなり、久し振りの演奏会としては、自分ではまあまあの出来であったと思った。

しかし、その後も依然として体のぐあいはかんばしくなく、上向きになって寝ていると、下腹部に何だかこころしたものができているような気がして、もしや妊娠でもしているのではないかと

思うようになった。これは産婦人科を訪ねる必要があると思い、近くのわりあいと評判の良い女医さんに診てもらったら、はたして妊娠であつた。

私は東京音楽学校（現、東京芸術大学）を昭和十三年に卒業し、十五年から東京女高師（現、お茶の水女子大学）へ年俸千円で教えに行くようになった。十六年にはコロンビアの専属になり、演奏活動も相当忙しかつた（芸名を加古三枝子という）。終戦後、主人（小泉文夫）と知り合い、二十四年に年下の主人と四面楚歌のなか、結婚した。私はすでに三十三歳だったので、もはや子宝に恵まれることはないだろう、とほとんど断念していた。

思いもかけない朗報に、私は幸福と感激で胸がふくれた（本当はお腹であるが）。主人はもちろん、同居している祖父母（私の実父母）も、晴天の霹靂のようなニュースに驚き、あれやこれやと気を遣ってくれるようになった。妊娠は三カ月で胎児は順調、予定日は翌年の六月五日ということであつた。

私は生来の楽道家であるため、優性な細胞は結合するが、劣性の場合途中で流産するとかして自然淘汰されるものだ、といとも簡単に考えていた。さつそく小さなガーゼの肌着を作つたり、おしめの用意をしたりと、もう家に赤ん坊がいるような雰囲気がいじめた。

学校でその話をする、同僚たちはまさかと思つていたせいか、驚いたり祝福したりして、LLサイズのスカートをくださつたり、ちよつとした騒ぎだつた。

そのうちにだんだんお腹が目立つようになってきたが、どうも胎児があまり動かない。

「両親がおとなしいから、きつとおとなしい、素直な子が生まれるのですよ」

などとみんなにひやかされたりした。近所のおばさんたちにも、

「いかに声楽家の三枝子さんも、その格好じゃ台なしですね」

などと言われたが、「案ずるより産むがやすし」という言葉もあるし、きつといい子が生まれるに違いないと、いたつてのんきに過ごしていた。

妊娠七カ月くらいのときに、ラジオ東京（当時テレビはまだなかった）から出演交渉を受けた。

歌うには相当下腹部にも力が入るし、断ろうかどうしようかとさんざん考えたが、出演料で可愛いベビーふとんを買おうと思ったら、急に出演したくなってOKしてしまった。

そのころは、演奏がすめばすぐその場で出演料がもらえたので、帰りにさっそく西川ふとん店に立ち寄り、出演料を全部はたいて、ベビー用品を買ってしまった。

お腹のほうはどんどん大きくなり、女医さんも経過は順調ですとおっしゃるので安心していたが、依然として胎児はあまり動かない。

最初の経験なので自分ではよくわからないが、ほかの人の話によると、ふつう胎児はお腹でボクシングをやるとか、けとばすとか、そのたびにぐすぐつたてて仕方がないが、そのために母親になるという喜びもまたいつそう強くなるというのだ。

祖母も少々心配して、

「もしや弱い子ができるのではないかね」

などと言ひ出した。

三月二十二日は私の誕生日、二十九日は主人の誕生日なので、二十九日に大勢の親戚を家に招いて、合同祝賀会をやった。おそらくそのときの無理がたたつたのだろう。その日以来、めつきり足にむくみがきた。

五月に入ってから学校も休んで自重していたが、五月三十日早朝、寢床で体をちよつと横に向けたとたんに早期破水らしい兆候があつた。本で読んだ知識によると、破水すると出産時の潤滑油が先に出てしまうことになり、たいへん難産する場合が多いということだ。

いくらのんきな私でも、これにはおおいにあわてた。さつそく荷物をまとめ、主人と一緒にかかりつけの産院へ入院することにした。女医さんは陣痛促進剤を注射したり、いろいろ手を打ってくださったが、さつぱりお腹が痛くならない。このままで子供が生まれれば、まったく楽なものである。結局、まる二十四時間という長い間、羊水のないお腹の中に子供はいたのである。

五月三十一日の早朝に、ものすごくお腹が痛みだした。これが、いわゆる陣痛というものかなと思つた。しかし、人間の精神の持ち方というものは不思議なもので、口の中で、

「痛くない、痛くない」

と唱えていると、わりあい苦痛が軽くなるような気がする。いずれにしても空っぽのお腹にそんなに長く胎児がいたのでは良くないし、早く産んでしまいたいという気がしたので、

「産室へ行きます」

と自分から申し出た。院長先生の産ませ方はたいへんお上手だったが、その周りで看護婦さんたちのはてんでこまいしていた。

出産の苦痛の最中に、ふとこんなことを考えた。

「昔は一ダースも産んだという人がざらにいたが、いったいどんな調子だったのかしら」

「好きでもない相手の子供を産むのだったら、さぞかし恨めしい気がするであろう」

「女だけが子供を産むなんて、神はなんと不公平なことをなさったのだらう……」

そのうち急に体が楽になった。どうやら生まれたいらしい。しかし、「オギャー」とも何とも言われない。これは死んで出てきたのか、と一瞬ハツとした。だがボソボソと変な音がしたと思ったら、

「小さな女の赤ちゃんです」

と看護婦さんが言った。とにかく死んではいなかったらしい。

じつは私は、子供を産むのなら絶対に男の子が欲しいと思っていた。才能さえあれば、男のほうがいい。どんなに得かわからない。当時の日本の状態では、女は何かにつけて損な立場にあると思っていた（その後少しは変わったかも知れないが）。しかし何はともあれ、私は昭和二十七年五月三十一日午前七時ごろに女の子を産んで、初めて女としての役目を果たしたのである。三十六歳だった。

「ジェニファーもやつと一人前の女になったね」

と主人が嬉しそうに言った。そのころ主人は、私がアメリカの女優、ジェニファー・ジョーンズにちよつと似ていると言って、私のことを「ジェニファー」と呼んでいたのだ。